

東アジア近代化について

—— 国際関係及西洋文化との接触 ——

依田熹家†

How The Differences in Modernization of Japan and China Came Out

According to the result of my research up until now, the success and the fast speed of Japan's modernization can be attributed to several overlapped reasons. It is a big issue to compare the reasons that brought about the differences in the speed of the two countries' modernization, and one or two reasons are just not enough for explanation. But it is still possible to point out several relatively significant factors among all.

The relatively significant factors under consideration, according to my research so far, are as follows:

1. At that time pressure emanating from Europe and America was chiefly directed towards China among East Asian countries, accordingly the pressure towards Japan remained relatively weak. Therefore, it could be considered as a propitious condition for Japan's modernization process.

2. Early in the seventeenth century a unified domestic market had already been formed in Japan. Later on this basis the movement against internal administrative division of Bakufu and Han (feudal domains) took place. This movement, aiming at the realization of a unified state with the Emperor at its center, developed into a concept of "Revere the Emperor" (尊王論),

†早稲田大学アジア太平洋研究センター教授

which was in vogue in the late Tokugawa period. And a unified state with a prerequisite of modern state, namely an absolutist state, was established with the Meiji Restoration. Although the state at this phase cannot be called a modern state yet, at the following stage the Movement for Freedom and Citizen's Rights (自由民権) aiming at a modern state took place under this crucial prerequisite. Driven by this movement the system of Meiji Constitution, as a basically modern state, was born, although it contained a fair number of pre-modern elements.

3. Part of the ruling class, the lower ranking samurais strongly opposed the current ruling system under the Japan's Bakufu system with lineage system and hereditary system as its principles. They shared with and represented the wishes of the peasants, workers and merchants at that time who desired to get released from the hereditary system. By contrast, China was based on a state-run examination system (科举制) and the whole ruling class were deeply confident and firmly persistent in the current system, thus they put up stubborn resistance towards any social change.

4. In Japan the ideology circumscribing the valid scope of the traditional ideology (Confucianism) took shape in the seventeenth century. As time passed by, the scope was considered to become more and more narrow. In the late Tokugawa period it was thought to be limited merely to the scope of the daily morals. Thus, there were very few obstacles on the road of introducing new culture into Japan.

5. When the harbors were opened for foreign trade, a unified domestic market had already been in existence in Japan. But as they were in the hands of the Japanese merchants, both foreign imports and Japan's exports had to be reliant on Japan's distributive organs. Therefore, some buffer effect was born. However, since there was yet no unified domestic market in China at that time, China had to accept foreign goods in a so-called stark-naked situation. In Japan people who engaged in the business of comprador used to exist, too, but they failed to grow as "capital of comprador" as did in China. This can also be attributed to the existence of a unified domestic market.

6. In introducing modern industry both Japan and China adopted a policy centering on "government-supervised, merchant-run" enterprises like government-run enterprises and semi-government, semi-private enterprise from the very beginning. However, due to the pressure of the Freedom and Civil Rights Movement (自由民権運動), Japan was able to get out of the situation relatively rapidly by selling off the government-run and government-private joint enterprises and switching to a policy centering on the private industries. But since then China, where the tradition of the bureaucratic enterprises was deep-rooted, had continued carrying out the "government-supervised, merchant-run enterprises" policy for a long time. As a result, a decisive difference showed in the two countries' economic development.

7. Japan had a traditional style of mass education. In the late Edo period, Japan had become a country with the most widespread diffusion of elementary education in the world at that time. This turned out to be a propitious point for its later modernization. In China as there was a strong tendency of learning for the sake of passing the official examination, the widespread dissemination of education of the common people fell behind.

8. During the middle of the nineteenth century Japan was the only nation remaining outside the China's tribute system in East Asia. Therefore in comparison with the center country (China) and the deeply enmeshed nation in the tribute system (Korea), Japan had long been successful in dealing with foreign affairs on a country-to-country basis.

Some of my research result were published: *An Introduction to the Comparative Study of the Modernization of Japan and China* by Ryukei Publishers, its Chinese translation *A Comparative Study of the Modernization of China and Japan* by the University of Beijing and its Chinese enlarged edition *A Comparison of Economic Theories in the Period of Modernization in China and Japan* by the International Broadcasting Press, and *Japan's Modernization — In Comparison with that of China* by Hokuju Publishing House, the Chinese edition: *Japan's Modernization* by the International Broadcasting Press and its English version: *The Foundations of Japan's Modernization — A Comparison with China's Path Towards Modernization* by the E. J. Brill, Leiden • New York • Koln. Besides, I also made a report entitled "The Comparison of Japan and China in the Period of the Opium War" as an introduction part of the "Japan's Culture and Edo Period" International Symposium held under the sponsorship of Prof. Umehara Takesi and Dr. Ohishi Shizaburo in Kyoto in October, 1986.

はじめに

日本の近代化⁽¹⁾は、世界の近代化の過程において重要な地位を占めている。

日本の近代化の特徴としては、そのテンポが極めて急速であった点が指摘されている。第二次大戦の前後の二回にわたって、日本は急速な経済発展を経験した。

しかし日本の近代化の特徴は、その急速な成長よりも、その発生地である西北ヨーロッパと異った地域において演じられたという点にあらう。西ヨーロッパから始った近代化の波は、その後全世界に波及したが、各地域において一様なテンポで発展したわけではなかった。近代化の成長はその発生地である西北ヨーロッパに近い地域に早く影響を及したとはいえ、むしろ西北ヨーロッパより離れた北アメリカと極東の日本において急速な発展を遂げた。また北アメリカの場合には、新たな要素が加ったとはいえ、文化的にも人種的にもなお西北ヨーロッパの延長としての性格が強いといえるのであるが、日本の

(1)「近代化」とは何かについては種々の論争がある。ここではその論点を整理する場合ではないので、一応資本主義経済を基本とし、それに伴う政治体制・思想の発展の総体を指すものとする。

場合には西北ヨーロッパとは全く異なる要素をもつ地域であった。日本の近代化が、その発生地である西北ヨーロッパとは「異質な」土壌の上に急速に発展したという事は、近代化自体が決して西北ヨーロッパのみのものでなく、普辺性を有するものである事を証明したものである。故に、日本の近代化の研究は、近代化の普辺的法則を研究するためにも重要な点であるといえるのである。

同時に、日本の近代化は、近代化自身の変化をもたらす契機となったといえるのであり、日本の近代化により近代化の「アジア化」が開始されたともいえるのである⁽¹⁾。日本の過去二回にわたる急速な経済成長、1970年代以降のアジア諸国の急速な経済成長は、資本主義のアジア化の面を無視する事ができない面を示しているといえよう。

日本と中国の近代化 日本と中国が近代化の道を歩み始めた時期は殆ど同じである。両国はその出発点に当って生産力の面・生産形態・文化の面において共通の点が多く、しかもヨーロッパ文化との接触やその学問への影響は、後に述べるように中国の方がむしろ日本よりも早かったのであり、科学・技術以外の情報も近代化の出発点の時期においては、中国経由で日本に入ったものが量的には多かったが、その後の近代化のテンポは日本の方が格段に速かったのである。

このような反近代化についての日本と中国の比較は当然「優等生」と「劣等生」といった観点から見るとべきではない。

同時に、従来一部において主張された「外圧が中国に集中していた」点からのみ説明するべきものでもない。筆者の見たところ外圧の差の要素は確かに存在した重要な問題ではあるが、日本と中国の近代化のテンポに大きな差が生じた原因は、多くの原因が総合されて生じたものであり一・二の要素から説明するべきものではない。両国の近代化の比較研究は、比較研究という研究方法一般の目的がそうであるように、近代化そのものの法則の探求でなければならぬであろう。

今回は筆者の従来の比較研究を基礎に、東アジア近代化に際しての、国際関係の面と西洋文化の接取についての面について述べたいと思う⁽³⁾。

I 国際的要素

19世紀の中期より始る東アジアの近代化は、欧米勢力の「外圧」を契機としている。またこの外圧のあり方とそれへの対応が、東アジアの国々のその後のあり方に極めて大きな作用を及ぼした事は事実である。

外圧はまず中国が向けられた。それは中国が東アジアにおいて卓絶した人口と領域を擁し、物産と資源に富む存在であったという理由の外に、中国は当時東アジアにおいて長期にわたって存在していた国際秩序である「冊封体制」の中心に位置していたからであった。従って冊封体制に対する東アジア各国

(1) 著者と銭国紅氏との対話から。

(2) 近代化の発生とその世界的展開は資本主義世界市場の形式によってもたらされたものである。日本も中国も各々近代化の萌芽といえる要素は育っていたが近代化の直接的契機は開港により資本主義世界市場の一部となった事によるといえよう。

(3) 日本と中国の近代化については、拙著「再増補日中両国近代化の比較研究序説」竜溪書舎（「日中両国現代化比較研究」北京大学出版社）、「日本の近代化」北樹出版社（「日本的近代化」中国国際広播出版社 “The Foundations of Japan’s Modernization” E.J. Brill）等を参照されたい。

のかかわり方がその後の東アジアの国々のかかわり方を決定した面が大きいといえる。

中国 中国は冊封体制の中心に位置したため、冊封体制の崩壊は自国の権威にかかわる問題であり、それを固執し、維持するために全力をついやし、世界情勢・東アジア情勢の変化を認識し、それに対応する事を困難にした。冊封体制は中国皇帝が「天下」全体の天子であるとの前提の下に成立したものであり、未知の国の使節の来訪は中国にとって「天下」の拡大であり、新たな「朝貢国」の出現として処理すべき問題であった⁽¹⁾。そのため自国を世界の一国として認識し、対外関係を処理する事は困難であった。

冊封体制の下における中国と他国の貿易は進貢貿易であった。この方式は「朝貢」に対する手厚い対給付とそれに付随する民間交易にによって成立っていたが、「蛮夷に対する中国の恩恵」の原則の下に許可されたものじあり、厳しい統制と量的制限を伴うものであり、そのため産業革命を経過して世界市場の拡大につとめていた欧米諸国にとっては、冊封体制の存在は大きな障壁と考えられるようになった⁽²⁾。

1840年に始るアヘン戦争により冊封体制は崩壊に向ったが、それは一挙に崩壊したものではなく⁽³⁾、アヘン戦争から1900年の義和団事件に至る中国の対外政策は、冊封関係の崩壊を阻止しようとする主観的努力に彩られている。1884～85年の清仏戦争、1894～95年の日清戦争も、いずれもベトナムや朝鮮に対する中国の宗主権の問題がからんでいた⁽⁴⁾。

冊封体制の崩壊は、同時にアジア植民地化の始まりであったが、その際旧来の冊封関係の存在を前提とする対外関係に固執し、対外関係を国対国の外交関係として処理しなかった事が中国の半植民地化をいっそう強める原因ともなった。冊封体制は中国が周囲の諸国よりも格段の実力を有する事を前提とする。しかし時には周辺諸国の方が軍事的に優位に立つ時代もあった。しかしそのような時代においても、生産力や文化の面では中国の優位は動かなかったため、多くの場合「撫」⁽⁴⁾の方法が採用された。

朝鮮 朝鮮は冊封体制の中心ではなかったが、16世紀末の豊臣秀吉の侵略の際に明の援助を受け、17世紀始の明清交代の際に清軍の侵入を受けたため、冊封体制に最も強く組込まれた国であった。特に19世紀中期以後は、支配者のなかにむしろ中国との冊封関係を固持することによって内外の危機を乗切ろうとする傾向が強く、外交的にも冊封体制を前提とした対外処理方法から仲々脱却できなかった⁽⁵⁾。

琉球 琉球は冊封体制の内に入っていたが、朝鮮ほど深く組込まれていなかった。それに反し日本の薩摩藩を通じての支配はより直接的なものであり、また日本との間には言語的・民俗的な共通点も多く、そのため冊封体制の崩壊過程において日本の統一国家体制に組込まれることになった。

(1) 乾隆帝時代の1793年に中国に来たイギリスの使節マカートニーは、三跪叩頭の礼を強制されそうになった。

(2) 貿易の制限の下においてはそれは「進貢国」にとって有利なものであり、薩摩藩が琉球を制圧して後も中国と琉球との冊封関係を認めていたのも、そのような有利な条件を利用するためであった。

(3) 当初中国は対外関係を「外交」とする事を極力回避しようとした。当初中国は対外関係の処理を「理藩院」で扱おうとしたが、諸外国の抗議にあい「総理各国衙門」を設けようとしたが、これも「各国を総理する」の意味があるとの抗議にあい、遂に「総理各国事務衙門」とした。中国が外交部を設けたのは義和団事件以後の1901年に至ってからである。

(4) 立前上は中国の体面を保ちながら、「歳幣」「歳賜」などの形で実際上の貢物を中国の方から送る方法である。胡繩氏は「アヘン戦争から辛亥革命へ」において、アヘン戦争当時、香港の割譲も「撫」の名目で行れた事を指摘している。

(5) 漢族の明王朝から満州族の清王朝に中国の政権が移ると、朝鮮において「中華は朝鮮に移った」との思想が生まれ、一時は「北伐論」が生じたが、冊封体制の中心になったわけではなく、清朝の冊封を受けた。

日本 日本は戦国時代以後冊封体制に組込れておらず、冊封体制の崩壊によって受ける苦痛は最も少く、むしろそれは日本にとって有利な状況といえた。東アジア諸国のなかで、日本のみが比較的順調に欧米諸国と外交関係を結び得たのはそのためであった⁽¹⁾。また日本は冊封体制の中心に位置していないため、「撫」といった観念・方法によって処理することなく、国対国の関係で処理する事ができた。更に日本は、17世紀末に成立した統一国内市場を基礎に統一国家成立の方向に向っていた。そのため1789年に成立した林子平の「海国兵談」は日本を世界の一国とし、従来の兵書が日本の国内戦を論じたのとは異り、日本と外国との戦争を想定して論じているのである。またペリー来航当時の佐久間象山のように「只今もし朝鮮・琉球をして夷狄と御称呼御座候はば、彼の小国だにも必ず甘んじて受け申すまじく、いはんや東西洋の大国をさして夷狄と御賤み御座候は、ただ此国の御無礼に当り申すべくと存じ奉り候」とする比較的合理的な国際観念も生まれ得たのである⁽²⁾。

欧米諸国が東アジアに進出した際に、国対国の「対等」を要求したが、それはあくまでも冊封体制を打破するためのものであり、実際の関係は不平等条約の強要であったが、日本は冊封体制内の位置せず、それにとらわれない立場にあった事は有利な点であった。

東アジア諸国のなかで、欧米の外圧にさらされながら、なぜ日本のみが植民地化されず、それ自身が植民地帝国となったのか、という問題を解くカギの一つは、当時日本のみが冊封体制の外に位置し、直接外部の世界に接し得る立場にあり、また冊封体制の崩壊によって自らの存在をおびやかされる事もなく、その崩壊によってかえって自らの地位を向上させることができたという点にあったといえよ⁽³⁾。

欧米勢力が東アジアに進出した際に、冊封体制にとらわれない国家が一つでも存在していたという事は重要な点であった。そのような国は、たとえ当初夷狄観を持っていたとしても、比較的容易にその立場を脱し、欧米諸国と一致した行動をとり得るからである。

このような立場から、日本は国際的には冊封体制を崩壊させようとしていた欧米諸国と協調し得たのであり、吉田松陰の「交易にして魯墨に失ふ所は又土地にて鮮満にて償ふべし」との立場も、福沢諭吉の「今日謀をなすに、わが国は隣国の開明を待つて共にアジアを興すの猶余あるべからず。むしろその伍を脱して西洋の文明と進退を共にし、その支那朝鮮に接するの法も隣国なるがゆえに特別の会釈に及ばず、正に西洋人がこれに接するの風に従って処分すべきのみ」⁽⁴⁾とする立場も、出現し得たのである。

II 西洋学術の接取

1. アジアにおける西洋学術の影響

日本の洋学の祖といわれる杉田玄白は、その回想録「蘭学事始」において、自分一代の比較的短い期間に急速に蘭学が広まった原因として「漢学にて人の知見が開かれていた」点をあげている。ここで述

(1) 冊封体制の中心に位しなかった日本は、「攘夷」の根拠となる華夷思想の基礎も弱かった。幕末の攘夷論のうち孝明天皇のような絶対的攘夷論はむしろ少く、その多くは押付けられた条約を破棄した後、自ら進んで開国する事を念頭に置いて居り、そのため比較的容易に開国に転じ得たのである。

(2) 文久2年幕府への上書

(3) 明治維新後もなく、日本は朝鮮を「自主の邦」と主張して冊封体制のいっそうの崩壊を促進すると同時に、不平等条約を押付けて自己の従属下に置こうとする。

(4) 「脱亜論」

べられている漢学とは儒学のみでなく医学・本草学・農学・天文学・数学などの科学・技術も含まれていた⁽¹⁾。

このように、日本の洋学は中国の学術を基礎として発展したものであった。ヨーロッパとの接触は中国は日本よりも早く、またその学術的な影響も日本よりも早かった。またその桃山時代から江戸時代初期にかけて南蛮文化の影響が見られたが、まだ芸術面や冶金・鉱山の排水等にとどまっていたのであるが、同じ時期の中国においては、既に明末に徐光啓らによってユークリッド幾何学や西洋暦法の紹介が行われ、梅文鼎（1633～1721）に至ると西洋暦法の導入ばかりでなく、中国古代の数学の価値の再評価が行なわれ、暦法は数学を基礎とするようになり、内藤湖南が「支那人に西洋数学が影響して、いろいろな本が出来ましたが、是は単に支那人の数学者に影響するのみでなくて、歴史家・経学者に大いに影響しました⁽²⁾」と述べているように、他の学術分野における客観的・合理的な研究方法に影響を与えたのである⁽³⁾。

このように、ヨーロッパとの接触やヨーロッパ学術の学問的影響も日本よりも中国の方が早かったのであるが、その後、日本においては洋学の学問としての市民権の獲得や洋学の発展は中国よりもはるかに早く、近代化の促進に確実に影響したのであった。

2. 日本における洋学発達の原因

この原因はどこに求められるであろうか？ 筆者はその原因は日本において旧来の支配的イデオロギーの有効範囲の限定が早く見られ、その有効範囲は次第に狭められていた事にあると考える。

いかなる支配的イデオロギーも当初は自らの万能性を主張する。中世ヨーロッパにおいては当初キリスト教神学がそのような地位にあり、地動説が出現した当時は厳しく弾圧されたのである。

日本も中国も近代化の出発点に当る時代において支配的地位を占めたイデオロギーは儒学であり、特に最も体系的内容をもった朱子学であった。

17世紀前半に日本朱子学の確立者であり、幕府の文教政策を担当した林羅山は、当時渡来した宣教師のもたらした地球儀を見ても、それが朱子学の中心原理である上下関係や「天円地方」の原理に反すると強く批判している。このような状況は旧来の支配的イデオロギーの全面的有効性とその絶対性が強く主張され得た時代であった。

同時に17世紀初頭の日本においては、朱子学は中国や朝鮮のように科挙制度によって国家権力と知識階級の直接的支柱となっていたわけではなく⁽⁴⁾、朱子学が官学として強調されても、民間には陽明学や古学などの朱子学批判の学説がかなり影響を与えていた。特に古学は朱子学と同じ「理」の追求を主張しても、朱子学における観念的な「理」に対し、「理とは条理である」と主張する事によって、特に法則性の追求こそが学問であると主張した点は注目に値する。

(1) ニーダムによれば明代の科学・技術は当時の全世界から見て高い水準にあった。

(2) 「清朝史通論」

(3) すでに宋代に起元をもつ金石学・校勘学もこの時代に精緻な発展を遂げた。くわしくは拙稿。

(4) この意味では科挙制の存在しなかった日本は「儒教国家」という事はできない。「寛政異学の禁」においても幕府や各藩の学校において朱子学者以外は正規の教師になり得ないとしたものであった。

3. 徂徠学における儒学の有効範囲の限定

17世紀末から18世紀初にかけて活躍した萩生徂徠（1666～1728）は、朱子学批判から出発し、「先王の道は天下を安んずるの道なり。その道は多端なりと雖も、要は天下を安んずるに帰す」、「先王の道は、先王の造るところ也。天地自然の道を非る也⁽¹⁾」、「聖人の道は専ら国・天下を治め候道と申候は、事物当行の理にても無之、天地自然の道にても無之⁽²⁾」としている。ここで注目すべきものは「天下を安んじる」ことであって「天地自然の道」、「事物当行の理」とは関係ないとしている点である。朱子学において典型的に見られるように、当時儒学は人間と自然の全ての範囲における有効性を主張したのであるが、徂徠の主張によると儒学の有効範囲はもっぱら政治の面、より正確に言えば政治理念の面に限定されているのである。そして儒学の有効範囲が限定され、「天地自然の道」や「事物当行の理」がその有効範囲の外にあるとすれば、それらの追求は別になされねばならず、儒学以外の「学」の存在も認めなければならぬことになる。「学問とは何もかも取入置て、己が知見を広むる事にて御座候⁽³⁾」という徂徠の有名な言葉も、従来いわれて来たようにそれが封建的倫理の追求のみを学問であるとする旧来の学問観からの解放という面の外に、儒学の有効範囲を限定する事によって、学問全般を解放したといえる⁽⁴⁾。徂徠の次の世代から蘭学の興隆が見られるのであるが、それは儒学の有効範囲が既に限定され、特に「天地自然の道」はその範囲外とされていたため、自然科学を軸とする蘭学が早くから「学」として認定され得たからであるといえよう。徂徠の思想史上における最大の功績は、「自然から作為の転換」にあるというよりも、儒学の有効範囲を限定した点にあり、いわゆる「徂徠学の衝撃」⁽⁵⁾の本質もその点にあったといえよう。この点が日本の、自然科学をむむ西欧文化の積極的摂取を容易にし、近代化にとっても重要な前提となったといえよう。

4. 儒学の有効範囲の一層の限定

このように徂徠学による衝撃が日本人の意識に及ぼした影響は大なるものがあつたが、その後徂徠学は一時一世を風靡したとはいえ、幕末においては一時「朱子学の復興」の現象が見られ、佐久間象山のように洋学と朱子学の双方に通じた学者も現れたのである。

筆者はこの原因は(1)徂徠学が不可知論に陥り、専ら漢詩文の方面に向つた事、(2)その後儒学の有効範囲を限定する方向は朱子学も含めて日本の儒学全体に採用されるようになり、その際最も合理的思考方法をもった朱子学がなお一定の教養的役割を果し得たこと、にあると考える。

徂徠は「唐宋以来諸儒の空理論は、多く紙上の空論にて候」と朱子学を批判する一方、「理は形無し、

(1)「弁道」。この点は徂徠の著作の至る所に見られる。

(2)「答問書」

(3)「答問書」

(4) 広い範囲の問題を合理的・的に追求した点や、ヨーロッパの学問にな価値を認めた点で新井白石もまた洋学への道を開いた。

(5) 丸山真男氏は「日本政治思想史研究」で、朱子学派の「自然の論理」から、「作為への論理」への転換が徂徠学の画期的な点であるとする。しかし小島康敬氏は「徂徠学と反徂徠」において、徂徠が「聖人」の「作為」やその跡としての道を語る際、その大部分は「天」との関連において説いており、またその「天」の内容から見て、徂徠学の本質は必ずしも「自然」から「作為」への論理の転換ではないとする。

故に準無し⁽¹⁾」,「天下の理, 豈窮め尽す可けんや⁽²⁾」と不可知論に陥っている。朱子学における「窮理」は近代的合理主義とは異なるものであったが, その合理主義的な面は一定の条件の下では近代合理主義に向う手掛りとなるものであった。

「寛政の三博士」の一人として朱子学復興を担った古賀精里は, 「古人の学は倫理のみ」とし, 同時代の朱子学者岡田寒泉は「儒者の学」を「実践倫理の学」と規定している。ここにはかつての林羅山のような儒学の有効範囲を無限とする姿勢は見られず, その有効範囲も徂徠の段階よりも一層狭く認識されているのである。

佐藤一斎(1772~1859)は「陽朱陰王」⁽³⁾と称され, 表面は朱子学者, 裏面は陽明学者として知られている。

一斎は「泰西の説は, 己に漸く盛なる機有り。其所謂窮理は以て人を驚かすに足る」とし, 「吾儒の窮理は唯々義を理るのみ」⁽⁴⁾と, 儒学の有効範囲を義すなわち道德の面に限定しているのである。彼は儒学の「易理の窮理」を「根株」, 「西洋の窮理」を「枝葉」としているが, 儒学の有効範囲を「形而上の道理」に限定する点は注目すべきである。「陽朱陰王の」の一斎の認識は, この段階において, 儒学の有効範囲を専ら道德面に限る事は日本の儒学の共通の認識となったことを示すといえよう。

佐久間象山(1811~1864)は, 朱子学者として出発し, 後に洋学を修めその双方に通じた学者であるが, 「道德・仁義・孝悌・忠信などの教は尽く漢土聖人の模訓に従ひ, 天文・地理・航海・測量・万物の窮理・炮兵の技・商法・医術・機械・工作等は皆西洋を主とし, 五世界の長所を集めて皇国の大学問を成し候義御座候⁽⁵⁾」, 「其教へ導き候筋は孔孟の正道を和げ論し, 悪事をせざる様に致し」⁽⁶⁾と述べている。

ここで注目すべき点は, 儒者象山が儒学の有効範囲と認める点は「仁義・孝悌・忠信」などの道德面, 特に「悪事させざる様」にする日常道德の面に限られている事である。つまり当面日常道德の面で儒学的原則を認めれば, その他の面における西洋の学術の摂取はもはや何の障阻も受けないことになる⁽⁷⁾。

萩生徂徠に始った儒学の有効範囲の限定は, 幕末の段階においては, 殆ど日常道德の範囲に限られることになり, 儒者特にその指導的部分も含めた認識となった。そして儒学の有効範囲外と考えられるようになった分野は洋学によって置きかえられているのである。従って幕末に見られるいわゆる「朱子学の復興」の現象も, 儒学の有効範囲を狭く限定した上での古典的教養としての普及であるといえる。

(1)「答問書」

(2)「弁道」

(3)これは幕府の儒官としての立場からそうせざるを得なかったと共に, 彼が朱子学・陽明学の双方に通じていた事を表している。

(4)「言志録」

(5)「勝麟太郎宛手紙」

(6)「事節を痛論したる幕府への上書稿」

(7)中国に接触し, 西洋学術を伝えたのは主にカソリック宣教師であり, 従って中国におけるヨーロッパの学術は常にキリスト教布教と一体となっていた。そのため中国・朝鮮においてはヨーロッパの学術はキリスト教と不可分とされ双方を含め「西学」と称され, 学術そのものの普及の障阻となった。日本と接触したのが布教と関係ないオランダであった事は, この点有利であった。

5. 中国の近代化と儒学

中国においては儒学は科挙制度を通じて国家権力と一体化していたため、儒学の有効範囲を限定する事は、中華帝国の権威そのものに挑戦する事を意味し、そのため儒学の有効範囲限定の動きは出現しにくかった。佐久間象山と同時代に生き、「海国図志」などの著作で幕末の人士に大きな影響を与えた魏源（1794～1856）は、西洋の事情については深い理解を示し、従来の価値観に対する新しい価値観を認めようとしたとはいえ、ここでも儒学の有効範囲の限定は提起されなかったのである。

また日本においては、儒学の有効範囲を限定する事によって新旧の価値観が徐々に交代したのに引きかえ、儒学が国家機構と堅く結合していた中国においては、「反孔」と「名教擁護」が激しく対立し、新旧の交代をいっそう困難とした。

中国の洋務運動においては欧米の武器・船舶・機械などかなり導入されたのであるが、その主体となった洋務派は反孔を掲げた太平天国に対する曾国藩の「討粵匪檄⁽¹⁾」に見られるような激しい「名教（儒学）擁護」を掲げて抬頭したのであり、儒学の有効範囲を限定する事は問題とならなかったのである。

日清戦争の敗北により洋務運動の欠陥が明かとなり、変法運動の発生を見た。変法運動の思想的指導者康有為は、実際には儒学の内容を改変しようとしたのであるが、一貫して「尊孔」を旗印とし、儒学の権威によって変法を行なおうとしたのである。これは、彼は「数千年来の君権の力」によって改良を行なおうとしたのであり、従って中国の君権のイデオロギー的支柱である儒学の有効範囲を制限する事はできなかつたのである。

変法運動が戊戌政変によって失敗すると、変法思想家の内部に変化が生じた。変法運動のもう一人の思想家梁啓超は、1902年に康有為にあてた手紙のなかで、「孔学は新しい世界に適しない点が多く、今後もこれを保持する事を主張すれば、それは北に行こうとして車のカジを南に向けるようなもので、方向ちがいとなります」、「私は意欲的に（孔教の）網を突き破り、新しい思想を造り出すことが自分の任務であると任じており、そのためにこの囲みを破ろうと熱心に考えております」、「数ならぬ私でも、かつては保教党の驍将でありましたが、今や保教党の大敵となりました」と述べている。この段階において梁啓超は儒学のなお評価すべき点は認めても、それを極めて狭い範囲に限定しているのである。

1860年代に中国の馮桂芬は「西学を採るの議」において、「いま夷の事情に通じている者は通詞と呼ぶが、彼らは概ね市井の軽佻、有閑の徒であって、郷里で相手にされず、衣食の道がなくなった挙句の果てにこれをやっている。その素質は愚鈍、その学識は浅薄、その心掛けもまた卑しく遊興・金儲けのほかは一切頭にないのである。しかも彼らはやっとう夷語に通じ、少しく夷字を知り、わずかに品物の名前と数、一通りの文法を知っているにすぎない。彼らが外国の学問に心を留めるといようなことがどうしてできようか⁽²⁾」と述べている。

同じ時代の日本における洋学や洋学者の地位と比較すれば、その間に大きな相異のある事は明かであ

(1)「粵」は広東・広西の称で、「粵匪」とはこの地方で挙兵した太平天国のこと。

(2)「西学を採るの議」「原典近代中国思想史」第二冊。

る。このような現象が生じたのは、科学の制度がある以上、儒学の經典の学習によって立身出世が可能であったため、優秀な人材はそれに熱中し、外国関係の学術は「学問」と認められず、それに従うものは社会から弾き出された者となり、有為な青年がそれに向うことがなかったところに、その原因がある。中国において儒学の有効範囲を限定する思想が仲々出現し得なかったのも、儒学が科挙を通じて直接国家の権力構成に関係していた以上、儒学の有効範囲の限定は直ちに中華帝国の国家権力・国家権威への挑戦に連る面があったからである。

6世紀に起源をもつ科挙は、皇帝の力をしのぐほどの勢力を有した特権貴族の専横を防ぐため、皇帝の意のままになる多数の官吏予備軍を必要とした点から生じたものであるが、宋代以後、モンゴル族の元朝の時期に約40年中絶したのみで1905年まで続き、非常な権威をもっていた。

この制度の最大の利点は、全国の各階層から有能な人材を政府機関に吸収し得た点であり、一定の家産があり、科挙の試験に優秀な成績をあげれば、大官僚となる事も不可能ではなかった。逆に科挙の試験に合格しなければ、いかに大地主・大官僚の子弟であっても「土豪劣紳」にすぎず、支配機構には参加できなかった⁽¹⁾。

このような制度は封建社会の制度としては極めて合理的な面があり、そのためモンテスキュー等ヨーロッパの啓蒙主義者たちは、それを現実よりも理想化した形とはいえ、高く評価したのであり、中国々内においても高い権威を持ち得たのであった。同時に上記に述べたように、「学問」とは科挙の試験と関係あるもののみと考えられるようになり、洋学・科学技術等が学問としての市民権を持つ事をさまたげたのであった。

また日本においては、比較的早くから権力以外の所に知識なり人材なりが存在し得たのである。日本の江戸時代は、厳しい身分制社会であったが、身分にかかわらず学問を修る事が行れた。江戸時代を通じて武士以外の身分のままのすぐれた学者や思想家はかなりの数にのぼる。蘭学や国学の発生・発展も民間の篤志家の果たした役割は極めて大である。学問を修る事が下層からの脱出のための比較的有利な条件であったとはいえ、それは必ずしも身分の変化と結び付くものではなかった。この事は学問が自身の能力を高め、向上をもたらすとする「普及・能力向上型」ともいうべき教育スタイルを生じ、下層迄の教育の普及を実現させた。これに反し、中国では科挙制により学問が役人となるための手段となり、実際上の身分を作り出したため、官界への希望を持たない者には学問は無縁のものとする風潮が生じ、「選抜・目的達成型」ともいうべき教育スタイルを生じ、学問は広く社会の各階層にまで浸透する事をさまたげた。

更に支配機構における人材の登用が或程度合理的な面を有した科挙制は、支配階層全体に現行体制維持に熱中させ、改革をさまたげる事になった。これに反し、不合理な世襲制・血統制を採用していた幕藩体制下においては、支配階層の一部をも含めて現行体制に対する反発があり、幕末に至ってそれは強化された。下級武士出身の福沢諭吉はその回想録である「福翁自伝」において、「私のためには封建の門閥制度は親の仇でござる」と述べており、横井小楠も「アア血統論、是れアニ天理に順ハンヤ」と述

(1)科挙も、もちろん金銭や閥閥関係とは無縁でなかったが、世襲制に比較すれば、はるかに合理的な制度であった。

べているのである。

科挙制の存在した朝鮮においても、同様な現象を生じた。

6. 朝鮮における西洋学術の影響

朝鮮は16世紀の末と17世紀の始に日本の豊臣秀臣と清軍による侵入を受けた。この事件はその後の朝鮮における対外関係や国内の思想状況、西洋学術に対する態度などに大きな影響を及ぼした。

日本の侵略に対し明朝が援軍を送ったため、当初朝鮮においては「尊明」意識が強まったが、後に満州族の清軍の侵略にあい、また明朝が清朝によって滅亡されるに及び、「尊明排清」の思想が抬頭し、一時は北伐論も主張された。しかし実際には北伐は不可能であり、清朝と冊封関係を結ばざるを得なかったが、「夷狄」である満州族によって「中華」の地が支配されたとする意識から、「中華は朝鮮に移った」との思想も強まった。

これらの点は、その後朝鮮の思想における華夷思想や名分論的な正統意識を強める事になり、対外関係や外部からの文化の接取に大きな影響を与える事になった⁽¹⁾。

特に学術の面で大きな影響を与えたのは、いわゆる「学統」の問題であり、明の滅亡とともに儒学の学統の正系は朝鮮に移ったとするものであった。朝鮮の思想界に大きな影響を与えた李恒老（1792～1868）は門人に対して「西洋が道を乱すのがもっとも憂うべきことである。天地の間に一脈の陽気が吾が朝鮮にあるのに、もしこれさえも破壊されるならば、天心がこれを忍びえようか。吾人は天地のために立心して此の道を明かにすること、汲々として火を消す如くにいそがなければならない。国の存亡は二の次である⁽²⁾」と述べたという。

学術における極端な正統観念の下では儒学の有効範囲を限定する事はおろか、朱子学以外の学問あるいは朱子学系の他の学派をも「邪学」とする思想となり、深刻な党争を巻き起したばかりでなく、西洋の学術や清朝の学術さえも「夷狄の学」として排斥することとなった。

明末の1603年に朝鮮にも漢訳西洋書が伝来したが、これも明朝の滅亡によってさまたげられ、その後清代の学術の新たな興隆に対し「北学」論も生れ、丁茶山らによる「実学」の主張も生れたが、清国や西洋を「夷狄」とする思想によってさまたげられた。

朝鮮の西洋の学芸との接触は、中国や日本と異り、直接に西洋諸国人と接触することなく、中国からの漢訳書籍を通じてであった。1653年にオランダ人ハメル（Hemhdrik Hamel）が済州島に漂着したが、直接交通の機会とはならなかった。

中国朝鮮における西洋学術をさまたげた問題は、中国においては西洋の学術の紹介は主としてカソリックの宣教師を通じ、伝導と結合していたため、キリスト教と西洋の学術が一体視され、特に朝鮮においては両者は「西学」として不可分のものと見られていた点にもあるといえよう。その方向は1801年の「辛酉教難」によるキリスト教弾圧によってそれを決定的なものとした。

(1)「朝鮮の儒者たちは新しい世界地理説を虚心に受容することができず、旧態依然たる天円地方説によった華夷的世界観に固執していた」—姜在彦「朝鮮の西学史」

(2)「華言集」雅言卷十一、尊中第三十（姜在彦氏訳）

この点、日本においては、17世紀中期以後接触したのがキリスト教伝導と関係なかったオランダであったため、有利な点があったといえよう。

7. アジアの近代化と儒学

最近東北アジア諸国の経済発展に著しいものが見られ、それらの国が「旧儒教圏」に属するという点や、東南アジア経済の成長のかなりの部分が華人経営の企業によっているという点から、儒学そのもののなかに、近代化を促進する要素があるかのような主張が一部に見られる。しかし既に見たように、アジアで最初に急速な近代化に成功した日本の過程を見れば、儒学の有効範囲を狭い範囲に限定した事がその原因であった。

江戸時代中期の思想家石田梅岩（1685～1744）は、「世の有様を見るに、町家ほど衰えやすきものなし」と、商業が農業や工業にくらべてなお不安定である事を指摘し、それは「商人多くは道を知らざる故」にありとし、「我教ゆる所は商人の道あることを教ゆなり⁽¹⁾」とするが、その内容は暴利・投機をいましめ、信用を重んずるといふものであり、秩序ある商取引の商業道德である。梅岩はその「商人の道」の多くを儒教道德から借用しているが、それは儒教の持つ日常常識の面であり、彼の立場は「商人の売利は士の禄に同じ」と述べているように、利潤の追求を肯定するものであり、むしろ「重本抑末（農業を重んじ、商業を抑える）こそ聖人の道」とする本来の儒学の立場から脱している。彼の系統の石門心学が、正統儒学からたえず異端視されたのも、そのためである。梅岩の「商人の道」は、儒学そのものに経済発展の道を求めたものでなく、商業道德の面に限定しているのであるが、その商業道德も「仏・老荘ノ教モ、イハバ心ヲミガク磨種ナレバ、舎ルベキニモ非ズ」、「儒道・仏道・老子荘子ニ至ルマデ、尽ク此国ノ相ケ（たすけ）トスル様ニ用ユルコトヲ思ウ可シ⁽²⁾」と述べているように、それさえも必ずしも儒学に限定しているわけではないのである。

明治初期から昭和初期にかけて実業界に大きな足跡を残した渋沢栄一（1840～1931）は、「不肖ながら私は論語を以て事業を經營してみよう」との信念をもっていたが⁽³⁾それは「従来論語を講ずる学者が仁義道德と生産殖利とを別物にしたのは誤謬である」⁽³⁾とする本来の儒学の立場を離れたものであり、梅岩と同じいわば「異端」の立場である。そして儒学というよりも「論語」のなかの「生活の智慧」に属する部分を借りて商業道德や経済活動のルール確立に役立てようとしたものであり、また経済人としての道德や個人的修養の分野に限定されているのである。

8. 東アジアの近代化と儒学

最近東北アジア諸国の経済成長はかなり著しいものがあり、それらの国が旧「儒教圏」⁽⁴⁾に属すると

(1)「都鄙問答」

(2)「聖賢証悟国字解」

(3)「青淵回顧録」

(4) 中国においても「漢字文化圏は存在したが、儒教圏なるものは存在しなかった」との主張がある。筆者は、少くとも「儒教圏」とい得る国は科挙制度による国家機構を有しなければならないと考える。「日中両国近代化における儒学」（大石慎三郎編「近世日本の文化と社会」雄山閣出版等を参照されたい。

いった点や東南アジア経済が主として華人経営によって担われているという点から、何か儒学そのものに近代化を促進する要素があるかのような主張が一部に見られる。しかし、既に見たように、アジアで最初に急速な近代化に成功した日本の過程を見れば、儒学の有効範囲を狭い範囲に限定した点が、その重要な原因の一つである事がわかる。従って最初の日本以外の、華人経営を含めたいわゆる「旧儒教圏」の急速な発展も、(1)それらの国々が、現在既にかつての植民地・半植民地の状態およびその後遺症から脱した段階にあること、(2)それらの国々も現時点においては既に旧来の儒学の全面的有効の観念からは脱している事、などがその主な原因といえる。また現在それらの国々はなお基本的には同族資本的段階にあり（同族会社の形態を多く採用する）、このような段階においては、同族的結合を基本的関係として強調する儒教思想が一定の有効性をもつかのごとく見えるからである。更に「賢人善政」こそ政治の理想」とする儒教の一面が現在この地域に一部存在しているいわゆる「開発独裁」的な構造とも関連しているといえよう。